あぜみち

◆ディズニーランドに負けていられない

一〇月中旬の連休、何年かぶりに子供たちを連れてディズニーランドに行ってみました。連休であったこともあって、各々のアトラクションに入るのに三〇分から一時間待つのは当たり前といった混みぐあいでした。朝の八時半から夕方七時半まで夢中で遊んできました。当たり前の事ですが、食事はすべてファーストフード、文化はアメリカ文化。親も子もそこでの思い出をアメリカ文化とともに胸の中にしまいこむ。家に戻ってもなお子供は、ディズニーのビデオを夢中で見ている。冷静になってよく考えてみると、このとんでもなく強力な洗脳システムにどっぷりとつかっていていいのだろうか、といった不安がおそってくる。

数日後、地元小学校（全校生徒数六〇数名）の合宿が二泊三日で行われました。たまたま私は実行委員長でもあり、ファーストフードに対するスローフードの素晴らしさの発見、地元の文化を知ること、地元の自然の素晴らしさを感じることを目標としました。子供たちは大自然の中を歩き回り、野鳥の観察、山野草の観察、地元の歴史の学習、水生生物の観察等、思い思い学習をしました。今年で二〇年目、子供たちはことのほか楽しみにしている一大イベントでもあります。昼間の時間帯は先生方が指導に当たり、夜はＰＴＡが指導します。ディズニーランドに行った日以来、私なりに感じていた思いを子供たちにぶつけてみたが、子供たちはなにを感じただろうか。

ビデオを観るなら日本昔ばなしがいい、食べるなら米がいい、住まいは、軸組み工法の日本家屋がいい、と口で言ってしまうのはいとも簡単な事ではあるが、子供たちには感性でしみじみ「それがいいね」と感じてほしい。先天的田舎人である私が、日々自然、森林と接する中で強く感じている部分をたとえあつかましいと思われようが、なにがなんでも地元の子供たちには伝えたい。

（静岡県富士見市　竹川将樹　林業）

◆農業は何時の時代も厳しいとの認識ですが、本当にそうでしょうか。

私は、一九九四年にオーストラリアで二週間、農業研修をしました。全国から三〇名が自費で参加。最初に訪れた農家はグラジオラスを五〇ヘクタール経営されているジョージさん。この方はユニークな経歴をお持ちで、農業を始める前は造船所の設計技師で部長さんでした。「どうしてサラリーマンを辞めて農業ですか？」と尋ねると、「俺は一生を人に使われず、自分の才能をグラジオラスに賭けたのだ」と、そしてオーストラリア広しと云えど、グラジオラスの専業は五名しかいないと胸を張りました。すかさず奥さんが、「あなた何を偉そうに、花だけなら儲からないから種子を売ろう。これならオーストラリアで販売できるのは家だけよ。人と同じことは止めようと提案したのは私よ」と胸を張って主張されました。私はこの奥さんの話にカルチャーショックを受けました。狩猟民族の考え方は私達農耕民族と全然違います。人と同じ事をしていれば安心と思う我々は甘いんじゃないか、他人との違いを誇る彼らは経営者としての資質に富んでいると。

農業は経営手腕と栽培学に秀でていないと成功は覚束ないと思います。男性が総ての意思決定をするのも問題で、女性も経営のパートナーと認識し、お互い能力を認め合うこと。農業は自由に時間を取れます。余暇を潤沢に取って自分自身を高める為に研修などは積極的に参加する、地域のしがらみにも疑問があれば堂々と論陣を張ることも必要です。

農業は楽しい、すごく楽しい。努力すればきっちり報われます。今は無登録農薬が社会問題になっていますが、これは消費者の安全志向と農家の外観重視に大きな乖離があるからでしょう。徐々に両者の隔たりは埋められますが、そのためにはお互い情報交換も必要でしょう。先の見えないときこそチャンス。因みに私の携帯電話の着メロは『明日がある』です。

（和歌山県有田市　森川文夫　農業）
Fumio1@pearl.ocn.ne.jp